

川が運ぶ木材 ... 流送

地域産業

第1章 十勝の平野や川がでるまで

第2章 先史時代と川

第3章 アイヌ文化と川

第4章 十勝開拓と川

第5章 発展と今、そして未来へ

用語

さくいん



十勝監獄(明治36年[1903]から十勝分監は独立)。この建物は山で木を切り、音更川を流し、製材し、建てるまで、受刑者たち自身がつくり上げた。(写真:帯広百年記念館蔵: 1)

林から切り出した木材を直接川にうかべ、川の流れによって下流へ運ぶ方法を「流送」といいます。

明治26年(1893)、十勝分監(刑務所支所)の建設が始まり、その材料は糠平あたり(上士幌町)の山で切り出され、音更川で流送されました。流送された木材は、今の音更町木野で引き上げられていました。(p161)

十勝分監(のちに十勝監獄)ができたあとも、昭和2年(1927)まで、帯広を中心としたさまざまな建物などの材料のために、受刑者たちは流送を続けました。

また、音更川では製紙会社も流送をおこないました。大正6~12年(1917~23)には帯広まで、その後、昭和16年(1941)までは上士幌まで、木材が流送されました。

林業と工業の発展

木材は、家・建物や生活道具の材料、燃料の木炭となるほか、鋸床(クルミ)、マッチの軸木(ドロヤナギ)、タンニン(カシワの樹皮)、線路の枕木や下駄(バッコヤナギ)、それに紙(トドマツやエゾマツ)の材料としても使われます。

明治23年(1890)、利別太(池田町)から鋸床用のクルミ材を舟便で大津(豊頃町)に出し、大津から神戸に移出していました。のち、軍備拡張でさらにたくさん本州に送られます。

明治25年(1892)、大津に十勝最初のマッチ軸木工場が建てられています。明治31年(1898)ころには3つの軸木工場があり、上流から原料のドロヤナギが流送がされていました。

明治の末には、新得町の佐幌川で木材が流送されました。

また、明治24~25年(1892~93)ころからタンニン用のカシワ樹皮が大阪に送られていましたが、明治42年(1909)には、止若(幕別町)に製渋(タンニン)工場ができました。



明治36年(1903)、利別太(池田町)にできた、マッチの製軸工場。(写真:『十勝国産業写真帖(北海道庁、1911)』より)



村田鋸(明治13年[1880]に最初の形ができた)の鋸床部分。茶色い木のところが鋸床。(協力:沖商店)

紙の原料としての木材

大正時代にはいと、製紙会社が十勝各地の山林から木材を切り出し、紙の材料としました。

十勝川とその支流(音更川、美生川、然別川など)、利別川とその支流(美里別川、斗満川、勲祢別川など)で流送がおこなわれました。

大正8年には、池田にパルプ工場ができます。昭和時代に入り、鉄道輸送、道路輸送が発達してくるにつれ、流送は減っていきます。十勝で最後まで流送をしていたのは、美里別川(本別町・足寄町)で、昭和29年(1954)まで続けられていました



池田町にできた、パルプ工場。昭和5年(1930)、閉鎖する。(写真:『池田町懐かしのアルバム』より)

1 帯広百年記念館(おびひろひゃくねんきねんかん): 帯広市緑ヶ丘2番地 電話 0155-24-5352 月曜日休館

2 ドロヤナギ: ドロノキともいう。

3 タンニン: 皮をなめす(4)ための物質。渋(しぶ) 草木の中にふくまれている。皮にふくまれるコラーゲン(たんぱく質)を結合させてなめす。布の防水や魚網の強化などにも使われた。

豪快だが危険だった... 技術、判断力、勇気が必要な流送作業

流送には、それぞれの川や場所に合わせた方法があります。

上流でよく行われていたのが「堤流」でした。堤流は、川にせきをつくって水をため、その後水門を開きその勢いで木材を流すというやり方です。

1日3回くらいおこなわれていましたが、下流にもせきがある時は、とくに注意してタイミングを合わせる必要がありました。

堤流の流れはすさまじく、流れる木材が川岸をこわして飛び出したりもします。岸を直したり、引っかった木材を流し直すなどの作業をしなければなりません。

堤流によって、水が多い川まで運ばれた木材は、自然の流れで流されました。これを「散流」といいます。

流送作業は、木材がうまく流れるように、あらかじめ川を整備したり、流れる木材に乗って下流まで運ぶなど技術、判断力、勇気が必要です。

危険な作業が多く、水に落ちて木材にはさまり、大けがをしたり、亡くなったりする人もいました。



堤流。せきの水門を開いたところ。右はしに人がいるので大きさがわかる。(写真:本別町歴史民俗資料館蔵: 6)



散流。ういた丸木に乗るのは簡単なことではない。利別川のシンコチャシ(p116:本別町西美里別)近く。(写真:本別町歴史民俗資料館蔵)

第1章 十勝の平野や川ができるまで

第2章 先史時代と川

第3章 アイヌ文化と川

第4章 十勝開拓と川

第5章 発展 今、そして未来へ

用語

さくいん

もう少し細かいこと

馬車・馬そり・修羅場・森林鉄道

流送するためには水量のある川がいります。流送できる場所までは、ほかの方法で木を運ばなければなりません。

多くの場合、馬が活やくしました。馬車、馬そりです。また、線路上のトロッコを馬がひく場合もありました。

冬場は、草や葉が少なく、雪とこおった地面のおかげで林を痛めずに通れるため、木材を運び出しやすい時期です。また、冬には農業ができないため、人や馬が集めやすくなります。

そのため、木の切り出しは冬に多くおこなわれ(冬山造材)、馬そりは、木材を運び出す重要な手段でした。ただし、急斜面で馬をあつかうのはとても危険で、高い技術が必要でした。

そのほか、急な坂に原木を落とす通路を作り、水を流すことでまさつによる発火を防ぐ「修羅場」によって、木を運ぶこともありました。

大正12年(1923)になると、陸別や足寄などに「森林鉄道」ができます。小さな汽車で、加工場や流送できる場所まで木材を運びました。森林鉄道は、地域の足としてもよく利用されました。

造材作業で飢えをしのいだ

中札内村には、福井県から多くの人が入植しました。彼らは、故郷の白山で、冬の袖夫(木を切って運び出す人)の経験がありました。

ある凶作の年、帯広市街では住宅の建築がさかんで、多くの木材が必要でした。入植者たちは故郷の経験を生かし、冬の間、日高山脈で造材作業をすることで、何とか飢えずにすみました。



木材を運ぶ馬そり。(写真:本別町歴史民俗資料館蔵)

4 なめす(糞す): 動物の皮は、そのまま使うとすぐにくさったり、乾燥するとかたくなったりする。樹液や薬品を使ってこの欠点を取り除く方法が「なめし」である。
5 パルプ: 紙の原料となるせんい。木材チップを高温で煮ることで取りだす。

6 本別町歴史民俗資料館(ほんべつちょうれきしみんそくしりょうかん): 本別町北2丁目 電話: 0156-22-2141(内410)日曜・祝日休館